

## 秋遊びにおける幼小のなめらかな接続についての一考察

A Consideration about Pursuit of Smooth Transitions of Kindergarten and Elementary School in Akiasobi

○青木 裕美<sup>A</sup> 野田 敦敬<sup>B</sup>

Hiromi AOKI Atsunori NODA

愛知教育大学 4年<sup>A</sup> 愛知教育大学生生活科教育講座<sup>B</sup>

Aichi University of Education

あらまし 平成 20 年学習指導要領改訂において、生活科の改善の基本方針として、幼小の具体的な連携を図ることや、自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を充実することなどが求められた。そこで、本研究では、秋遊びにおける学びの連続性に関する教師の意識調査を行い、幼小でのなめらかな接続について考察していく。キーワード：生活科、自然遊び、小1プロブレム、幼小連携、なめらかな接続

### I 研究の意義

平成 20 年の中教審答申において、「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ることなどが指摘されている」<sup>1)</sup>と示された。また、小林宏己(2009)が「就学前教育と小学校教育の『接続の段差』をなめらかにして、…(中略)…不安やストレスといった心理的な負担を軽減していく取り組みが必要とされる」<sup>2)</sup>と述べている。

これらのことから、幼小のなめらかな接続を踏まえた「学びの連続性」を確保することは重要である。そのために、幼小での連携や交流が必要であることが分かる。しかし、これらの重要性を認識してはいるものの、その取り組みは十分とは言えず、就学前教育から小学校教育にかけての学びの連続性を理解するための道筋を明らかにすることが必要であると考ええる。

また、近年自然に直接触れる経験が減少していると言われている。布谷光俊(1995)が「幼児後期、児童前期の発達には、彼らが身近な環境と直接かわる具体的で総合的な活動や体験を通して成し遂げられる面が大きい。」<sup>3)</sup>と述べているように、直接的な自然体験は重要であり、児童が自然に関心をもち、積極的に働きかける必要があると考えられる。

そこで、本研究では、学びの連続性に関する教師の意識調査を行い、現状を把握していく。それを踏まえて、授業見学などを通して、秋遊びにおける幼小のなめらかな接続について考察していく。

### II 意識調査について

調査時期：2011年6月14日～8月8日

調査対象：幼稚園教師(48人)

小学校教師(101人)

調査方法：質問紙法

調査内容：学びの連続性における教師の意識調査

### III 結果及び考察

秋遊びの4つの活動(どんぐりごま、松ぼっくりのけん玉、葉っぱのお面、秋の素材を使ったアクセサリー)において、遊び道具作成時にどの性質や仕組みを、どの程度気付くことをねらいとし、重視するか、という問いに対して、  
A：どんぐりごま・松ぼっくりのけん玉  
B：葉っぱのお面・アクセサリー  
では、次のような違いがみられた。

Aについて、大きさ・色・形という性質に気付くことを重視する割合は小学校と幼稚園では同程度である。一方、どんぐりごまの軸の長さ・つけ方という仕組みに気付くことを重視する割合は小学校の方が高く、段差も小さいことから、なめらかな接続をしていると考えられる。

Bについて、5項目(大きさ・色・形・におい・手触り)中、におい以外の4項目に関して、小学校も幼稚園も同程度の割合で重視している。しかし、においについては、小学校と幼稚園とで有意差がみられ、幼稚園の方がより重視していることが分かった。

この結果より、仕組みに気付くことにおいてはなめらかな接続をしていると言える。しかし、性質に気付くことにおいて、小学校と幼稚園で同程度、または幼稚園の方が重視する割合が高いため、なめらかな接続をしているとは言い難い。そのため、小学校でも、性質に気付くことに目を向けることが重要であると考えられる。

### 【引用文献】

- 1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)」, 2008, p.92
- 2) 小林宏己『小1プロブレムを克服する! 幼小連携活動プラン—考え方と実践アイディア—』, 明治図書, 2009, p.8
- 3) 布谷光俊『幼・小の接続, 発展と生活科』, 近代文藝社, 1995, p.30